

『真冬の散歩』

桑原 紀子

今は暦の寒の最中。空は青く晴れているけど、生き物の姿は小さな影さえ見えません。ヤレヤレ、今月の出会いは、なしかな・・・と、片平の尾根を越えて歩いていきました。

野原の陽だまりに、オオイヌフグリの青い花が小さな群落を作っています。

枯れたセンダングサのトゲトゲの種に、小鳥の白い羽が引っかかっていました。よく見ようとしゃがんだら、たちまち私の服はセンダングサの餌食です。

びっしりついた種をはずして、ほっとして、また歩き始めました。椿などの葉裏で越冬するウラギンシジミ蝶を探してみましたが、見つかりません。冬の野原や林の中には、他にも越冬蝶や越冬トンボが眠っているはずなので

すが、そう簡単に、彼らの隠れ家は見つかりません。でもちょっとドキドキしながら葉裏を探るのは、なんとも楽しいのです。

林の傍の斜面に、タヌキのけもの道を見つけました。細く続いています。ツツピーツツピーと、もう春の囁きをするシジュウカラの声も聞こえます。

2時間近くの散歩でポケットに、白いカタツムリの殻2個、黄ボシ足長蜂の黄色い巣、鳥に突かれたカマキリの卵のうを拾いました。人間

には作れない、彼らの生きかたそのものの、不思議で魅力的な形をしています。

真冬の散歩は、小さな生き物たちの見えない、聞こえない息遣いを感じさせてくれました。

